

# 秘め事は雨の中

*Kyoko & Yukinari*

---

西條六花

*Rikka Saijo*



エタニティ文庫

## 目次

秘め事は雨の中

5

書き下ろし番外編  
俺の好きな人

349

秘め事は雨の中

仕事が終わって外に出た途端、湿った雨の匂いが全身を包みこんだ。

朝から降りはじめた雨は、夕方になり、仕事を終えて帰る頃になってもまだやまない。辺りには水溜まりがいくつもできていて、落ちてくる雨粒が水面に小さな波紋を広げていた。

赤い傘を差した杏子は、バス停の列に並んだ。職場は街の中心部からほど近い場所にある、市立図書館だ。その目の前にあるこのバス停は、通勤のために毎日使っている。四、五人いる利用者の顔ぶれはいつもだいたい同じであるものの、雨の日にだけ見かける人もいた。

(あ、やっぱり今日もいる……)

年齢は杏子と同じ、二十代半ばくらいだろうか。細身で今風の服装をしている彼は、いつも本を読んでいる。バスを待つあいだも、そしてバスに乗りこんだあとも、片手になんらかの本を持って読み耽っているのが印象的だった。

読んでいる本のジャンルはベストセラー小説だったり、自己啓発的な本だったり幅広く。図書館の司書という職業柄、杏子はいきなり気になってチラリと彼が手にしている本を見てしまう。

青年はかなりの読書家のようなだが、杏子がカウンターを担当しているときにその姿を見たことはない気がする。とはいえ勤務先の図書館は規模が大きく、来館者も多い。彼が来ていたとしても、わからないかもしれない。

ふと時計を見ると、バスが来るまでにはまだ数分あった。何気なくスマホを開いてみたところ、メッセージがきている。

送信者は、交際相手の孝一だ。「ちよつと急ぎで必要だから、金を貸してほしい」と書かれた内容を見た杏子は、憂鬱な気持ちで目を伏せた。

大学時代から交際している木下孝一とは、かれこれ五年ほどのつきあいになる。だがここ最近、あまり会えていない。大学を卒業したあと、杏子は図書館司書に、孝一は会社員になった。営業マンの彼は仕事の帰りが遅く、この三カ月ほどは会っても「疲れた」と言っただけが多い。

そんな素っ気なさを目の当たりにするたび、杏子は互いのあいだに吹く隙間風を感じていた。それでもしばらく会わなければ寂しく、顔を見れば好きだと思っただけで、どうにか続いている。でもつきあい始めの頃のような熱は、すでにない。

（こんなふうにお金の話でさえなければ、もっとうれしい気持ちで会いに行けるのに）ため息をつきながらスマホを操作し、「六時には家に着くけど」と返信する。するとさほど待たず、孝一から「じゃあ、七時に俺ん家に来て」と返事がきた。

それを見た杏子は、釈然としない気持ちになる。

（いつもなら、もっと帰りが遅いつて言うくせに……）

こちらが会いたいと言ったとき、「仕事で帰りが遅いから会えない」と断られたことが何度もあった。「営業職だから帰る時間はまちまちな上、遅くなりがちだ」という彼の言葉を、杏子はこれまで鵜呑みにしてきた。しかし返信を見ると、つい「こんなときばかり早いのか」という皮肉な考えが浮かぶ。

鬱々とした気持ちを画面を閉じることでやり過ぎし、杏子はスマホをバッグにしまった。多少自分勝手なところがあるものの、孝一は基本的には優しい人間で、そんなところが好きだ。近頃都合よく使われているように感じてしまうのは、コミュニケーション不足からきているのかもしれない。

（会って話をすれば、こんな気持ちも少しは晴れるかな）

ふと顔を上げると、ちょうど道のむこうからバスがやってくる場所だった。思考を切り上げた杏子はバスに乗るため、雨の雫が滴る傘を閉じた。

\* \* \*

図書館は午前九時十五分が開館で、杏子は毎朝八時半頃出勤している。開館までの時間は、朝礼や返却本の整理、新聞の穴あけやファイリングなど、やるべき仕事が多い。開館後も、午前中はカウンターでの本の貸し出し業務だけでなく、新刊図書を選定会議やレビュー書き、来館者の要望に応じるレファレンス業務などに追われ、なかなかの忙しさだ。

午後、仕事が一段落してパソコンに向かった杏子は、重いため息をついた。

孝一に呼び出された日から、すでに二日が経つ。あの日、約束したとおり午後七時に孝一の家に着くと、スーツ姿で出てきた彼は「今帰ってきたところなんだ」と言った。

『でさ、さっきお願いした件だけど』

顔を見るなり玄関先でそう切り出され、杏子のため息をついて答えた。

『一万円でいいの？』

差し出したお金を嬉々として受け取る孝一を、杏子は複雑な気持ちで見つめた。

『助かるよ、サンキュ。ここんとこ、飲み会が多いんだ。給料が出たら返すから』

これまでも何度か金を貸しているが、孝一から返ってきたことはない。そんな現状に

少しモヤモヤしつつも、久しぶりに笑顔を向けられるとそれも些細なことに思え、杏子は「まあいいか」と考えた。

しかしそんな杏子の目の前で、彼が言葉を続けた。

『それでさ、ごめん。俺、これからちょっと友達と会う約束があつて』

『えっ……』

孝一の目的は自分が持つてくる金だけだったのだと気づき、杏子は言葉を失う。

彼に会うのは、十日ぶりだ。せっかく今日は一緒に過ごせると喜んでいたので肩透かしを食らい、うれしい気持ち急遽に萎んでいく。代わりにこみ上げてきたのは、理不尽な扱いに対する怒りだった。杏子は思わず孝一に向かって言った。

『何それ。友達と遊ぶからわたしには帰れつて——それじゃわたし、まるでATMみたい』

『いや、だからごめんつて』

『今日だって久しぶりに会ったのに、話すのはお金のことだけ？ 最近はお金も寝てばかりだし、孝一はわたしのことなんか』

『……あー、もう』

杏子の矢継ぎ早な言葉を遮り、孝一が言った。

『グダグダうるせえなあ。それならいいよ。俺急いでるし、金は返すから』

『えっ』

『ほら、これでいいんだろ』

杏子に一万円札を突き返し、孝一は舌打ちしてドアノブに手をかけた。

『悪かったよ、ATM扱いして。——じゃあな』

玄関から外に押し出され、目の前でドアを閉められた杏子は、呆然とした。

(じゃあな、つて……)

こちらが言いすぎたのだろうか。——だから彼は、怒ってしまったのだろうか。でもここ最近の自分への扱いはあまりにもぞんざいで、杏子はどうしても言わずにはいられなかった。

あの日のやり取りを思い出すが、ため息が漏れる。二日経った今も、孝一からの連絡はない。気にはなつたものの、彼への怒りがあつた杏子は半ば意地になり、それを放置していた。

(……たまには向こうから、謝ってくれてもいいのに)

ほんやりと作業中のパソコンの画面を見つめ、杏子は恨みがましく考える。

孝一を怒らせてしまった後味の悪さと、「自分は間違つたことは言っていない」という葛藤が、ずっと杏子の心を重くしていた。一切連絡がないことが、彼の怒りの強さを表しているように感じ、杏子の気持ちに次第に迷いが出てくる。

(やっぱりわたしから謝ったほうがいいのかも……)  
 不満はまったく解消されておらず、納得できていないが、このまま連絡がないならそうするしかないような気がする。

つきあった当初は、こんなことはなかった。孝一は四六時中一緒にいたがり、会えないときもまめにメールや電話をくれた。ときおり喧嘩けんかをしてもあまり長引かず、こちらに対する態度や話し方にも、もっと優しさがあったように思う。

五年のあいだに変化した関係を、杏子は最近少しく感じはじめていた。パソコンの画面をスクロールしながら、孝一の態度が変わってしまった理由はなんなのだろうと考える。気づけば彼はよそよそしくなり、会う頻度が減っていた。しかし思い返してみても、これといって理由はない。

(倦怠期、なのかな)

五年つきあっていて、飽きぎきたのだろうか。杏子には心当たりがないが、彼のほうはこちらに不満を抱いているのかもしれない。

気づけばもう久しく、孝一と深い話をする機会がなくなっていた。生活リズムは微妙にずれていて、仕事に共通点もない。こうしてすれ違って会話すらなくなるなら、はたして彼とつきあっていく意味はあるのだろうか。

(でも……)

——別れるという選択ができないのは、きっとまだ彼のことが好きだからだ。

こんなふうにくしくしゃくしていても、杏子は孝一とやり直せるかもしれない希望を捨てきれずにいる。

ふと窓の外を見ると、朝の晴れ空が嘘のようにどんよりと重い雲がたちこめていた。予報では曇りになっていたが、空は今にも雨が降りだしそうな気配だ。

このあいだロッカーの置き傘を使ったまま持つてきていないため、傘の用意がない。それを不安に思っているところで、カウンターから呼ばれる。

「佐伯さん、資料のご相談の方がいらしてらんですが」

「はい、今行きます」

杏子は椅子から立ち上がる。カウンターに向かいつつ、終業後、自分から孝一に連絡してみようかと考えていた。

\* \* \*

天気予報は案の定はずれて、夕方から雨が降り出した。

遅番だった杏子は、午後八時の閉館のあと、図書館の外に出て途方に暮れた。雨足は強く、あたりにはあちこちに水溜りができはじめている。最寄りのバス停には図書館の

駐車場を抜けて行かなければならず、それなりに距離があった。しかもこの時間帯はバスの本数が少なくなるため、次のバスまで二十分ほど待たなくてはいけない。

(あーあ、課長のお誘い、断らなければよかったかも……)

雨が降っているのに気づいた上司は、「車で送っていいか」と申し出てくれた。しかし家の方向が逆なのに、遠回りさせるのは申し訳ない。そう考えた杏子はつい「大丈夫です」と断ってしまい、今に至る。

とりあえず孝一に連絡しようと考えた杏子は、図書館の入り口の軒下のきしたでスマホを取り出した。

言いたいことはあるが、まずは気持ちを抑え、孝一に「話したい」と言ってみるつもりだった。先日のこちらの言い方が悪かったというのなら、謝ってもいい。杏子の中には、これからも彼と交際を続けていきたい気持ちが、依然としてある。

(「昔みたいに戻りたい」って……言ってみようかな)

意地ばかり張らず素直に接してみれば、孝一の態度も変わるかもしれない。

そんな希望を抱きつつ彼の番号に電話をかけてみたところ、「この電話はお客様のご希望により、お繋ぎすることができません」というアナウンスが流れた。思わずスマホを耳から離れた杏子は、まじまじと画面を見つめる。

(えっ……?)

電話番号は登録されているため、間違いようがない。もう一度かけても同じアナウンスが流れ、杏子はじわじわと混乱した。

——こちらの番号が、着信拒否されている。そんな考えに思い至り、ためしに「連絡ください」とメールを送ってみると、案の定送信できずにメッセージが返ってきた。

(メールも、受信拒否されてるかアドレスを変えられてる……?)

ドクドクと心臓が鳴る。

あまりのことに呆然としながらも、杏子は徐々に事態のみ込めてきていた。

孝一はおそらく、意図的にこちらを切ったに違いない。このままフェードアウトするつもりで、連絡の手段を断ち切った——そんな結論に至り、杏子はスマホの画面を見つめる。

(どうして……?)

確かに最近、自分たちの関係はぎくしゃくしていた。孝一は会ってもどこかおざなりで素っ気なく、杏子はそんな彼に不満を抱いている心情をあからさまに態度に出していたかもしれない。

だが、こんな終わり方はひどすぎる。

このあいだの一件が、それほど彼の氣に障さわったのだろうか。——あるいは他に、何か理由があるのだろうか。



つきあいはじめてからの五年間、孝一とのあいだにはいろいろな出来事があった。何度も喧嘩けんかをして別れ話が出たときもあつたが、こんなふうには話すことすら拒否されたのははじめてだ。

だからこそ、連絡を断られたこの状況は、彼が本気だという気持ちの表れのように杏子は感じた。

(別れ話もしたくないってこと……?)

ふいに雨足が強まり、図書館の軒のきから大量の雨の雫しずくが落ちてくる。やりきれない気分であつむいていこうと、じわりと目が潤うるんだ。

さまざまな思いが心の中に渦巻渦まいて、杏子は顔を歪ゆがめた。まさかこんな形で、終わりにされるとは思わなかった。五年という交際期間をこんなにも呆気あつけなくなつたことにされる自分が、なんの価値もない人間のように思えてくる。

しばらく図書館の軒下のきしたに立ちつくしていたものの、いつまでもこうしていても仕方がない。

杏子は雨の中、バス停に向かつて歩き出した。降りしきる雨があつというまに髪や服を濡ぬらしていき、シフォンのブラウスが肌に貼りつく。ベッタリとした感触が気持ち悪いが、もうかまうまいと思つた。

図書館の敷地の外に出ると、目の前の大きな道路を車が何台も水飛沫みずしぶきを上げて通り過

ぎていく。行き交う車のライトや赤いテールランプを眺めながら、杏子は暗いバス停に一人で佇たふんだ。

(……わたしのことが嫌になつたんなら、直接そう言えばいいのに)

言われたら言われたで、シヨックだつたかもしれない。でもこんなふうに一方向的に終わりにされるよりは、よほどましだ。

これまで二人で積み上げてきた時間は、一体なんだつたのだろう。大学三年のときに友人の紹介で知り合つて、孝一はすぐに交際を申し込んできた。彼の熱意にほだされ、杏子はつきあいをOKした。

二十代半ばなかに差し掛かかつた一昨年おととしあたりから周りでも結婚する友人が出はじめ、杏子は「いつか自分たちも」と自然に考えていた。

(わたしの独りよがりだつたのかな……)

思えば彼の口から、結婚に対する具体的な話を聞いたことはなかつた。そんな事実、杏子は今頃になつて気づく。

(馬鹿みたい……わたし)

本当はずっと前から、孝一の気持ちは冷めていたのかもしれない。そして自分は、そんな彼の変化をあつさり見過ごしていたのかもしれない。そう考え、杏子の心は苦しい気持ちでいっぱいになる。

気づけば降りしきる雨で、全身がすっかり濡れていた。前髪から雨の雫がポトポトと落ち、肌には貼りつく衣服が気持ち悪い。しかしバスが来るまであと十五分もあり、杏子は苦笑いする。

「ひどい格好。でも何かもう、どうでもいいや」

別に誰に会うわけでもないのだから、不都合はない。

投げやりな気持ちで車が行き交う往來を眺めていると、ふいに一台の大型バイクが目の前を通り過ぎていった。バイクは少し離れたところで一旦停まり、すぐにUターンしてバス停の前まで戻ってくる。

杏子は不思議に思ってそれを見つめていた。バイクの運転手が、かぶっていたヘルメットを脱ぐ。中から現れた顔を見た杏子は、驚きに目を瞠らした。

（この人……）

——雨の日だけにこのバス停を利用し、いつも傘を差しながら本を読んでいる男性だ。明るすぎない色の髪にすっきりとした頬、どこか懐く見える目と甘い顔立ちが印象的な、同年代の青年だった。

彼は全身濡れそぼった姿で立ちつくす杏子に、声をかけてきた。

「——たまたまバスで会いますよね？」

「えっ……はい。あの」

「ここで何してるんですか」

話しかけられると思っていなかった杏子は、戸惑いながら答える。

「バスを……、待ってるんですけど」

泣いていた自分が恥ずかしくなり、杏子は急いで頬を拭う。

雨で濡れていてわからないかもしれないが、もし涙に気づかれているなら、非常に気まずい。

（……どうしてこの人は、声をかけてきたんだろう）

黙って通り過ぎてくれればよかったのに——そう考えていると、彼が言った。

「……ひよっとして、泣いてるんですか」

不躰な言葉にじわりと頬が熱くなり、杏子は即座に否定する。

「な、泣いてません……っ」

（なんなの……この人）

彼がどういふつもりなのか、まったくわからない。たとえ泣いているように見えたとしても、普通は見えて見ぬふりをするだろう。それがほぼ知らない相手なら、なおさらだ。早くいなくなっただけ——そう考える杏子を、彼はじっと見つめてくる。「でも……」と何か言いかけたが一度口をつぐみ、彼は気を取り直したように言った。「よかったですら後ろ、乗りませんか」

「えっ?」

「ヘルメット、もうひとつあるんで。送っていきますよ」

「け、結構です」

唐突な提案に驚き、杏子は慌てて断る。それにかまわず、彼はバイクの後部シートを開けてヘルメットを取り出すと、ニッコリ笑って差し出してきた。

「どうぞ」

「あの、わたし、ほんとに……」

「送ります。いつまでもここにいたら風邪を引くし、そんな状態じゃバスにも乗りづらいでしょ」

彼が濡れた服のことを言っているのか、それとも泣いている顔について言っているのかは、わからない。

だが確かにこのままバスに乗るのは気が引けて、杏子は押し黙る。すると彼はバイクから降り、こちらまで歩み寄ってきた。

彼の背がとても高いことに、杏子は目の前に立たれて初めて気づいた。見上げた杏子の頭に、彼がヘルメットをかぶせてくる。そして驚く杏子の手首をつかみ、バイクのそばまで連れていった。

「あのっ、わたし……」

彼の髪が、降りしきる雨で濡れていく。服の袖で濡れた後部シートを拭いた彼は、杏子に微笑んで言った。

「すみません。ちょっと濡れてるけど、どうぞ」

先にバイクに跨り、彼はもう一度後ろのシートを示す。

「早く。車来ちゃうんで、乗ってください」

「えっ? は、はい」

半ば強引に押し切る形でそう言われ、杏子はためらいながら後部のシートに跨る。

(……今日はスカートじゃなくてよかった)

そんなことを考えていたら、彼が突然後ろ手に杏子の両手をつかみ、自分の腰に回す。ドキリとする杏子を見下ろし、彼は言った。

「危ないから、ちゃんとつかまって」

細身に見えて、彼の体格はしっかりとしていた。急に知らない男性に密着することに なった杏子が戸惑っていると、彼はヘルメットをかぶり、バイクを発進させた。

動き出したバイクは思いがけないスピードで、つかまる手に自然と力がこもった。杏子は目の前の背中を、複雑な気持ちで見つめる。

——顔を見知っていた自分が雨の中あんなところに立っているのを見て、彼は気の毒に思ったのだろうか。もしそれでわざわざウターンしてきたのだとしたら、相当なお人

好しに違いない。

しばらく走ったところで、バイクは赤信号で止まった。彼は杏子を振り向き、ヘルメット越しのくぐもった声で言った。

「先に俺の家に寄ります。タオルを貸しますから」

「いえ、あの、適当なところで降りしてくれれば——」

そこで信号が青に変わり、彼は杏子の言葉に答えずにバイクを発進させる。

いつも同じバスに乗っていたのだから、おそらく彼の自宅も杏子の家と同じ方向なのだろう。申し出はありがたいものの、杏子はすぐに帰ろうと思っていた。

(……これだけ濡れてるんだから、今さらタオルを借りてもね)

バイクに乗ったのは初めてだが、スピードを感じて結構怖い。

なりゆきで彼の体に強くしがみつきながら、降りしきる雨をヘルメット越しに浴び、杏子は心の中の戸惑いをじっと押し殺した。

## 2

バイクは市立図書館から十分ほど走り、とあるマンションの駐車場に乗り入れた。

杏子の自宅からは、バス停ふたつ分ぐらい離れている。この程度の距離なら、きつと歩いて自宅に帰れるはずだ。そう考え、停車したバイクから降りた杏子は、ヘルメットを脱ぐと彼に渡して言った。

「乗せていただいて、本当にありがとうございました。わたし、ここからは歩いて帰りますから」

「うちに寄ってってください」

「あの、ご迷惑になりますし、本当にご迷惑……」

屋根つきの駐輪スペースにバイクを停めた彼は、予備のヘルメットを後部シートにしまう。そして自分のものをホルダーにかけると、杏子をじっと見つめてきた。

その眼差しまなざしの強さに、杏子はひそかにたじろぐ。短い沈黙のあと、彼が言った。

「……すぐく言いにくいんですけど、服、濡れて透すけてるんですね」

「えっ?」

自分の胸元を見下ろした杏子は、にわかに恥ずかしさが募るのを感じた。ページュの薄いシフォンのブラウスは、彼の指摘どおりキャミソールと下着のラインが透けている。杏子の顔を見つめた彼は、ニッコリ笑って言った。

「だからそのまま歩いて帰るの、どうかと思って。うちの洗濯機、乾燥機能がついてるので、よかつたら乾かしていつてください。そのあいだは服を貸しますし、帰りは傘も貸しますから」

「でも……」

ほぼ初対面の彼に、そこまで親切にされる理由がない。

杏子の戸惑いを察したのか、彼は「そんなに警戒しないでください」と言った。

「確かにお節介かなとは思いますが、一応顔見知りじゃないですか。見かけた以上、放っておけないですし」

元々人好きのする顔が笑うと、さらに人懐こい印象になる。その邪気のなさに、杏子はわずかに毒気を抜かれた。

警戒しているこちらのほうが、なんだかいたたまれなくなるような爽やかさだ。杏子が申し出にためらっているうちに、彼は「こっちです」と言っつさつとマンシヨンのエントランスに向かう。

(どうしよう……)

断りきれずについていきながら、杏子はブラウスの胸元を掻き寄せる。

ちょうど一階に停まっていたエレベーターに乗りこみ、彼が三階のボタンを押した。やがて開いたドアのすぐそばの部屋の鍵を開け、彼が「どうぞ」と杏子を招き入れる。

部屋は1LDKで、典型的な単身者用の造りだった。玄関を入れて正面のドアの向こうは、八畳ほどのリビングになっている。室内は男性の一人暮らしにしては整頓されていて、シンプルな三人掛けのソファとテーブル、ラグや小さな観葉植物が置かれていた。リビングの奥にある部屋は寝室のようで、ドアが開け放たれた薄暗い部屋の中には、シングルサイズのベッドや備えつけのクローゼット、大きな本棚が見える。

彼は寝室からタオルと黒いTシャツとハーフパンツを持ってくると、リビングの入り口で立ちつくす杏子に手渡した。そしてキッチン奥の洗面所を示して言う。

「むこうで着替えてきてください。たぶん二十分くらいで乾きますから」

微笑みかけられ、タオルとTシャツを抱えた杏子は、言われるがままに洗面所に向かう。

洗面所のドアを閉め、濡れて肌に貼りつくブラウスとキャミソール、クロップドパンツを脱いだ。タオルで髪と体を拭いた杏子は、渡された服を着る。下着が透けない黒いものを選んでくれたのは、おそらく彼の配慮なのだろう。

洗面所を出た杏子から、彼が脱いだ服を受け取る。入れ替わりに洗面所に向かいつつ、

彼は笑って言った。

「牛乳、飲めますか？ ホットミルクを用意したんで、よかつたらどうぞ」

リビングのローテーブルの上には、温かい牛乳の入ったマグカップと砂糖が置かれている。至れり尽くせりのもてなしに、杏子は驚いた。

(なんでこんなに……親切なの)

リビングのテーブルに向かいながら、杏子は部屋の中を眺める。ラグに座り、シンプルのデザインのカップに砂糖を少し入れた。口をつけた途端、ホッと息が漏れる。

(……あったかい)

五月の半ばとはいえ、夜はまだ空気が冷たい。自分で思っている以上に冷えていた体に、ミルクの温かさがじわりと沁みだした。

彼が洗面所から戻ってきて、杏子はカップをテーブルに置き、慌ててお礼を言った。

「あの……本当にすみません。何から何までお世話になってしまつて」

「いえ、たまたま通りかかってよかつた。俺、普段はバイク通勤なんです。雨の日だけバスを使うんですけど、今日は夕方から降ってきたので、そのままバイクで帰ってきました」

いつもは夕方五時頃に仕事が終わるが、今日は職場で用事があつて遅くなった、と彼はつけ足した。あの時間に通りがかったのは、本当に偶然らしい。

目が合うと、彼はニツコリ笑いかけてくる。その爽やかさに落ち着かない気持ちになり、杏子はぎこちなく視線をそらした。

再度カップに口をつけながら、「あのバス停を使うということは、彼の職場は自分の勤める図書館の近くののだ」と考える。見たところ服装はカジュアルで、なんの仕事をしているのかは想像がつかない。

彼はテーブルのすぐ横のソファに座ると、何かを思案するようにしばし沈黙した。やがて顔を上げた彼が、杏子を見つめて問いかけてくる。

「こんなこと聞くの、失礼かもしれないんですけど……。さっきなんで泣いてたのか、聞いていいですか」

突然の質問に戸惑ったが、彼のまっすぐな眼差しに見つめられると、なんだか拒否しづらい。ここまで世話になっておいて突っぱねるのもどうかと思ひ、杏子は聞き直つて答えた。

「別れたんです、つきあっていた人と。別れたつていうか——一方的に終わりにされて」言葉にすると、その事実がズキリと心が痛んだ。

自分の中ではまだ納得しておらず、何ひとつ消化できていない。そう思いながらも、杏子はわざとんでもないふうを装つて言った。

「ひどいですよね？ 五年もつきあつたのに、なんにも言わずいきなり着信拒否され

ちゃったんです。メールもSNSもブロックされて……。お金だって、貸してなのに」  
 語尾が震えそうになった杏子は、マグカップを持つ手に力をこめる。落ち着くために  
 ゆっくり大きく息を吐き、杏子は言葉が続けた。

「本当は少し前から、彼とはぎくしゃくしてたんです。それでもわたしはやり直した  
 いて……。昔みたいに戻りたいって、思っていたんですけど」  
 ——杏子は孝一とつきあってきた頃のことを思い出す。喧嘩けんかもたくさんしたはずな  
 のに、脳裏に浮かぶのはなぜか楽しかったことばかりだ。

「でもきつと、彼のほうは……。そうではなかったんですよ」  
 ふいに涙がこぼれて、杏子はカップを置くと急いで頬を拭う。

急にこんな話をされたら、目の前の彼は困ってしまうに違いない。ましてや泣くな  
 て——そう思いながらも、涙をこらえることができなかつた。

鼻をすすると、無言でティッシュの箱を差し出される。杏子はそこから二、三枚抜き  
 取り、鼻をかんだ。濡れた目元も拭い、一息ついたところで、彼が言った。

「……泣いていたのは、そういう理由だったんですね」

杏子は黙って肯定する。彼が小さく嘆息した。

「うーん、なるほど。なんていうか……。うまく言えないですけど」

彼は言葉を探すように一旦黙り、言葉が続けた。

「あくまで俺個人の意見ですが、つきあっている相手を突然切るような男とは、別れて  
 正解だったって考えるのはどうですか？ きつとこの先つきあっても、いつか絶  
 対あなたを傷つけると思うんです、そういう相手は」

彼の言葉を聞いた杏子は苦笑い、目を伏せる。

「あなたの言うとおりかもしれないけど……。でもわたし、こんな終わり方をされて、  
 なんだか自信がなくなっちゃって。五年もつきあったのに、わたしはあっさり捨てられ  
 る程度の存在なんだって考えたら——なんの価値もないように思えて」

「そんなことないですよ」

杏子の言葉を、彼はすぐさま否定した。

「価値がないなんてこと、絶対にないです。相手の人が、ちゃんとあなたに向き合う勇  
 気がなかっただけだと思います。ほら、よく言うじゃないですか。『最近の若者は人と  
 ぶつかるのが怖くて、すぐ逃げる』って」

きっぱりと言いつけられたことに驚き、杏子はまじまじと彼を見つめる。

そして思わず噴き出した。雰囲気からして、彼は自分より少し年下を感じる。そんな  
 彼に「若者」呼ばわりされる孝一が滑稽けげんで、わずかに溜飲りゅうこんが下がった。

(ぶつかるのが怖い……。本当にそのとおりなのかも)

確かに誠意のある人間ならば、きつとこんな終わり方は選択しないだろう。人とさち

んと話すことも、向き合うこともできない——そんな人間だったのだと考えると、孝一の行動に説明がつく気がした。

自分は孝一に依存しすぎたのかもしれないと、杏子は思う。

別れて一人になるのが怖くて、ここ最近の彼の態度、そしてそれを不満に思う自分の気持ちから、目をそらしていた。本当は別れることだって少しは頭をよぎっていたのに、実際に行動に移さなかったのは、自分もぶつかるのが怖かったからだ。——現状を変えたくないという、後ろ向きな気持ちがあったのだ。

「……ごめんなさい、こんな話をして」

杏子はポツリと謝罪した。

「さっき、一度バス停の前を通り過ぎたのに、戻ってきてくれたんですね？ わざわざそんなことしなくても……よかったのに」

すると彼は「あー、それは……」と言い、返事をためらうように視線を泳がせる。

その態度を不思議に思った杏子が見つめると、彼は少しづつが悪そうに黙りこみ、やがて口を開いた。

「……放っておけなかったんです。あなたのことはいつもバス停で見ている——気になつていたので」

「えっ?」

「俺はあなたに、近づきたかったんです。あなたに対して、以前から好意を持っています。だからさっき、あそこで見かけて——チャンスだと思った。知り合いきっかけになればいいなって、安易に考えて……。すみません、あなたは彼氏のこと傷ついて、泣いてたのに」

彼の言葉を聞いた杏子は、急に心の芯が冷めていくのを感じた。彼に抱いていた感謝や好感が、みるみるうちに頑ななものに変わる。

「気になつていた」と彼は言うが、一体自分の何が彼の興味を引いたのだろう。

(わたしのことなんて……なんにも知らないくせに)

よく知りもしない自分への好意を語る彼に、杏子の胸に警戒心が湧く。

そもそも彼はなぜ、初対面に等しい人間にここまで親切にしてくれるのかと、杏子は疑問を抱いていた。笑顔にごまかされるようについてきてしまったが、彼の気持ちを聞いた今は、「下心があったのか」と嫌なことを考えてしまう。

孝一のこともあり、杏子は殺伐とした気持ちになつている自分を感じていた。

愛や恋といった感情が、すべて薄っぺらいもののように思えてくる。五年もつきあつていたのに、好きでつきあつていたはずなのに——そんな孝一にあつさり捨てられた現実、目の前の彼に仄めかされた好意を、孝一と同様のひどく軽薄なものに思わせていた。



気がつけば杏子は、彼に問いかけていた。

「——わたしが気になるって、どうして？」

杏子を取り巻く空気が変わったことを感じ取ったのか、彼が訝しげな視線を向けてくる。彼を見つめて、杏子は続けた。

「あなたはわたしのこと、なんにも知らないのに。名前も、歳だって……。それで何が気になるのか、すっごく不思議」

「気になったら、おかしいですか？」

「だって顔しか知らないでしょ？」

思いがけず強い声が出て、杏子は内心驚いた。

杏子の態度から苛立ちを感じた様子で、彼が黙りこむ。自分の気持ちを持って余した杏子は、彼から目をそらした。自分を気にかけて親切にしてくれた人間に、なぜここまで攻撃的になるのかわからない。

ふつつつと身の内を焼く怒りにも似た思いは、制御できずに溢れ出そうとしていた。

「……そっか。わたしをここに連れこんだのは、だからなんだ」

杏子の言葉に、彼は驚いた顔をして言った。

「——違います、俺は」

「家に連れこめば、どうにかできるって思ってた？」

杏子は挑発的な眼差しで彼を見た。

「わたしをここに入れたのは、『あわよくば』って思ったからじゃない？」

彼は眉をわずかにひそめ、じっと杏子を見つめる。

「言いすぎだ」と理性は押し留めようとしていたが、杏子は簡単に好意を仄めかしてくる彼がどうしても許せなかった。

今の杏子は、人の好意なんて不確かなものは信じられない。人の気持ちは変わり、冷めてしまえば、たとえ好きだった相手でも平気で傷つけられる。そういうものなのだと、孝一との件でよくわかった。目の前の彼がこちらにどんなイメージを抱いているのかわからないが、いっそそれを壊してやりたいという気持ちだが、杏子の中に渦巻いている。(幻滅して……わたしへの好意なんか、失ってしまえばいい)

杏子は彼を見つめて、軽い口調で言った。

「いいですよ。じゃあ、しましよ」

彼は怪訝な表情になり、杏子を見た。

「……何をですか」

「密室で男女がすることって、ひとつでしょ。わかっているくせに」

杏子の言葉を聞いた彼が、眉をひそめる。杏子はわざと明るく続けた。

「わたし、もうフリーなんです。さっき言ったように、彼氏に一方的に切られちゃいま

したし。だからあなたとそういうことをしても、全然かまわないの」

彼が無言で杏子を見る。テレビなどの音がない室内は、しんと静まり返っていた。彼の沈黙が、じりじりと杏子を追い詰める。理不尽でひどい絡み方をしているのは、自分でもよくわかっていた。それでも引くに引けず、杏子は往生際悪く言い募る。

「わたしに好意を抱いてるんなら、あなただって多少はそういうつもりで……この家に連れこんだんでしょ？ だったら素直になればいいのに」

言っているうちにいたたまれなさをおぼえ、杏子は顔を歪めた。話せば話すほどひどい言葉が出てきて、止まらない。そもそも自分は、一体何に対してここまで苛ついているのだろう。

彼はじつと杏子の横顔を見つめていたが、やがてため息をついて言った。

「……どうしてそんなことを言うのか、わからないです。俺はそういうつもりで家に入れたんじゃないので」

落ち着いた彼の声にどこか呆れた雰囲気を感じ、杏子は視線を揺らした。

思わず衝動のままに口走ってしまったが、自分が滅茶苦茶なことを言った自覚はある。勝手に彼の言葉に煽られ、苛立って——やっていることは、完璧に八つ当たりだ。

気まずく押し黙った杏子に、彼が言った。

「俺があなたに好意を持っていると言ったことが、そんなに嫌でしたか？」

「……それは」

「気になっていたのは確かですけど、別に何もするつもりはありませんでしたよ。濡れた服のまま帰るのはどうかと思って、親切心で誘ったんです。……でもまあ、男の独り暮らしだし、誤解されるのは仕方ないかな」

彼の声に自嘲するような響きを感じ取り、杏子は居心地悪くうつむく。

(何やってるんだらう……わたし)

罪悪感がこみ上げ、杏子は膝の上の手を強く握りしめた。

おそらく彼の、言うとおりのだろう。先ほどまでの彼の態度には、下心など微塵も感じなかった。むしろその邪気のなさに驚きすらおぼえていたのだから、杏子の発言は完全に八つ当たりで、ひどい言いがかりだ。

熱を持っていた頭の芯が徐々に冷めていき、惨めさで胸がいつぱいになる。杏子は苦く笑って言った。

「……そっか。どうせわたしなんか、あつさり捨てられるような女だし。……あなたがその気にならないのも、当たり前前かも」

彼に拒否されて冷静になった一方、なおも恨みがましくこんなことを口走る自分に、嫌気が差す。いたたまれなくなった杏子は、バッグをつかむと立ち上がった。

「ごめんさい、もう帰ります。服、返してもらっていいですか？」

「——待ってください」

すぐにでもこの場から立ち去りたい一心で洗面所に向かおうとした瞬間、突然彼に手首をつかまれて、杏子は驚いた。有無を言わさぬ程度に強い力に、心臓がドキリと音を立てる。

「……っ、あの」

「あなたの置かれた状況を馬鹿にしたつもりはないし、魅力がないとも言ってません」  
切りこむような鋭い口調に、杏子は息をのむ。彼が言葉を続けた。

「そんなふうには挑発するような言葉を口にして——俺がなんて答えれば、あなたは満足なんですか？」

その問いかけに、杏子は動揺した。

彼の様子からは、努めて理性的であろうとしているのが見て取れる。杏子は唐突に自分の言葉が、彼を深く傷つけたことに気づいた。

向けられた好意を否定し、親切な行動すら揶揄した。いくら孝一にひどい扱いを受けたくとしても、自分が彼に言ったことはあまりにも失礼だ。

しかし罪悪感をおぼえる一方で、「自分はしよせんこの程度の女なのだ」という、捨鉢な気持ちにもなっていた。もう彼にもわかっただろう——と杏子は諦めに似た感情を抱く。自分は彼の親切も好意も、素直に受け取ることができない。彼が好きになる価

値などない、惨めで卑屈な女だ。

一刻も早く帰りたくなり、杏子はつかまれた手を振りほどこうとする。そのとき彼が、口を開いた。

「——あなたがそんなことを言うなら、俺はつけこみますよ」

「えっ?」

「そのつもりで連れこんだと思いたければ、そう思ってくれていいです。あなたがつきあっていた相手と別れたんなら——俺には好都合だ」

彼の言葉の意味を考え、杏子にはわかにか危機感をおぼえた。自分が言ったことは彼を挑発する内容だったのだと、今頃になって気づく。勢いで誘ってみたものの、本当に彼と寝る覚悟があつたわけではない。むしろ断られることが前提で、嫌われたくて口走った言葉だ。

(早く……帰らないと)

「あの、わたし……」

焦りをおぼえた杏子が失礼を詫びて帰ろうとした瞬間、彼は手首を握る手に力をこめる。

おもむろに立ち上がられ、背の高い彼に間近で見下ろされた杏子が息をのむと、彼はニッコリ笑って言った。

「——むこうの部屋に行きましょうか」

\* \* \*

リビングから続く六畳間には、紺色のカバーがかかったシングルサイズのベッドがあった。ベッドサイドには小さな棚とランプが配置されており、棚の上には読みかけらしい文庫本が無造作に置かれている。

腕を引かれて薄暗いその部屋に連れこまれ、杏子は勢いよくベッドの上に押し倒された。すぐに体の上に覆いかぶさってきた彼は、呆然とする杏子を見下ろして言う。

「誘ったのは、あなただから……もう止まりませんよ」

リビングから差しこむ明かりの逆光で、彼の表情が見えない。

名前すら知らない男とこんなふうになっていることに、杏子の頭はついていけず混乱していた。

彼が身を屈めて、こめかみに口づけてくる。ビクリと引きつる杏子の体の上を、確かめるように大きな手が這い回った。

Tシャツの裾から入りこんだ手に素肌を撫でられ、杏子の背すじをゾワリとした感覚が駆け上がる。そのままブラ越しに胸に触れられ、焦って声を上げた。

「ま、待って……!」

「雨で濡れて湿ってる。——脱がせますよ」

杏子の言葉をあつさり無視し、止める間もなく背中に戻った彼の手が、ホックをはずす。Tシャツとブラを頭から引き抜かれ、無防備な姿にされた杏子は、内心パニックになった。

(どうしよう——どうしよう、こんな……)

調子に乗ってあんな言い方をした先ほどの自分を、思いきり引っぱたいでやりたい。そんな強い後悔で、杏子の胸はいっぱいだった。

思い返せば、彼が怒って当然の流れだ。ずぶ濡れの自分を厚意で家に招き、服を乾かしてもてなしてくれた人間を、わざとひどい言い方をして傷つけた。実際に行為をするつもりはなかったという何をどうしたらわかってもらえるのか、混乱して言葉がまったく思い浮かばない。

リビングからの明かりで真っ暗ではない部屋の中、肌を晒していることが恥ずかしく、ひどく不安になる。そんな杏子の表情を見た彼は、ふと眦を緩めて笑った。

「怖がらないでください。本当に嫌がることはしませんよ。優しくしますから」

そう言って彼は杏子の肩口にキスを落とすし、手のひらですっと肌を辿った。

「……細いですね。強く抱くと、折れちゃいますよ」

「あっ……………」  
肩から首筋に唇を這わされる感触に、ゾクリとする。耳の後ろを舐められ、耳朶を軽く噛まれて、杏子は思わず首をすくめた。

「や、……………」

「耳、弱いですか？」

ささやかなる声に心臓が高鳴った瞬間、耳の中に舌を入れられて、杏子は身を振る。

「あっ……………」

体の上を這い回っていた手が、胸のふくらみをやんわりとつかんだ。頂を指のあいだに挟みこまれ、杏子はその鋭い感覚に息を詰めると、彼がひそやかに笑う。

もう片方の胸を口に含まれ、濡れた感触に体が跳ねた。軽く吸われると一気に感覚が鋭敏になり、杏子の体温が上がる。

「んっ……………あ、やっ……………」

ときおり強く吸われるたび、勝手に体がビクビクと震えた。胸のふくらみに音を立てて口づけた彼が、顔を上げて柔和な笑みを浮かべる。

「ああ、そうだ。俺の名前は加賀つていいいます。加賀、雪成」

体を起こし、杏子のハーフパンツを脱がせながら、彼がそう自己紹介する。こんな状況で名乗る呑気さが理解できず、杏子は混乱した。

ハーフパンツを床に放り、へそのあたりにひとつキスを落として、彼——雪成が下着に手をかけてきた。杏子は慌てて声を上げた。

「ま、待って。わたし、謝りたいの、あなたに」

「何をですか？」

「あなたに……………その、下心があって、わたしを家に入れたんじゃないかって言ったこと。ごめんなさい、本当にひどい言い方をして——だから」

「ああ、いいんですよ、別に」

雪成はあっさりそう答え、早口でまくし立てていた杏子の言葉を遮る。そして手を取って指先に口づけ、ニッコリ笑って言った。

「気にしてません。むしろそう思ってくれて、全然かまわないです。——俺はもう、やめる気はないので」

「……………えっ」

状況に不釣り合いなほど、彼の笑顔は爽やかだ。呆然と見つめる杏子に、雪成は言った。「なんだろうな、あなたの言葉で、俺の中の変なスイッチが入っちゃったみたいです。『そんなに挑発するのなら、応えてやらなきゃ』みたいな」

「……………っ、そ、んな」

——だとしたら、それは自業自得だ。動揺しながら、杏子はどうかして彼を思い留

まらせることはできないかと考えをめぐらせる。その最中、突然指先を舌で舐められて、ドキリとした。

「あっ……」

「でも、ひどくするつもりはありませんよ。怖がらせたくもないし……。うんと優しくしますから」

杏子の混乱はピークに達している。自分の言葉でスイッチが入ってしまったらしい雪成を止めることは、もう無理なのだろうか。

考えていると、彼の手が再び下着にかかった。杏子は咄嗟に強くその手をつかみ、押し留める。

「……………」

杏子が必死で手に力をこめると、雪成は動きを止めた。彼は一旦杏子の下着から手を離し、小さく息をつく。

「困ったな、嫌がることはしたくないけど——電気を消したらいいですか？」

明るさに羞恥をおぼえていた杏子は、思わずうなずく。雪成は微笑んで杏子の頬を撫でた。

「OK。……じゃあ、ちょっと待っててください」

彼はベッドから下り、電気を消しにリビングへ向かう。そんな彼の背を呆然と見つめ

ながら、杏子は内心、猛烈な焦りに駆り立てられていた。

（待って……別にわたし、暗ければいいって了承したわけじゃ）

今すぐ逃げ出したほうがいいと思いつつも、体が動かない。そうするうち、雪成が電気を消して部屋に戻ってきた。「どうしよう」と心臓をバクバクさせている杏子をよそに、彼はベッドサイドで自分が着ていたVネックのカットソーを脱ぎ捨てる。

途端に細身だがしなやかな印象の上半身があらわになり、薄闇に浮かぶそのシルエツトに杏子はドキリとした。そのままベッドに上がってきた雪成は、杏子を見つめて甘いしぐさで頬にキスをし、下着を脱がせる。

（一体どうして……こんなことになっちゃったの）

そんなことを考える杏子の膝を押し、雪成が脚のあいだに体を割りこませてきた。

杏子に覆いかぶさり、胸の先端に舌を這わせながら、彼の手が太ももを撫で上げた。恥毛に触れた手が、そっと花卉を割った。

「は……………」

わずかに潤んだ蜜口を、雪成の指が遠慮がちに探ってくる。愛液のぬめりをまわせた指で花芯に触れられると、じんと甘い疼きがこみ上げ、思わず杏子は足先でベッドカバーを乱した。

「あっ、あ……………」

雪成は杏子の反応を見ながら、微妙に指先の力の加減を変えてくる。途端に潤みはじめた蜜口をときおり指がいたずらに辿り、そのたびにかすかに濡れた音が響いた。

「……んっ……」

やがて入り口をくすぐっていた指が内部にもぐりこんできて、隘路をゆつくりと進んだ。硬い指が内側をなぞる感触に、杏子の体がじわりと汗ばむ。根元まで指を埋められ、奥で少し動かされると、中が勝手に反応して強く締めつけた。

「は、あっ……」

「奥、ビクビクしますね。このへんが好きですか」

「待っ、……や、あっ……!」

敏感なところで指を動かされ、高い声が出た。

ひとしきり杏子の反応を確かめるように動かしたあと、雪成は指を一旦引き抜き、数を増やしてまた奥まで探ってくる。

狭い内部を穿つ動きに、肌が粟立った。溢れた愛液で、彼の指が動くたびに濡れた音が出ることに羞恥を煽られ、杏子は戸惑う。

「はあっ……あ……っ……」

(どうしよう——わたし、こんな)

——完全に流されている。自分の上にいる男は、顔だけは知っているものの素性は

まったくわからず、つい先ほどなし崩しに名前を聞かされただけの相手だ。それなのにこんなにも感じているのは、彼の触れ方が優しいからだろうか。

杏子が自分の反応に混乱していると、暗がりの中で雪成が笑う気配がした。

「……このまま指で達って、終わりにしますか?」

「えっ……?」

意外な言葉に杏子は驚く。

「最後までするつもりだったけど、やっぱりやめておこうかな。あなたはためらっているようだし、無理強いはいしたくないので」

彼の言葉を聞いた瞬間、杏子の胸にこみ上げたのは複雑な気持ちだった。

雪成がどんな人間なのか、わからない。話し方は丁寧で折り目正しく、快活で明るい笑顔には、人の警戒心を緩ませる不思議な魅力がある。だが、こちらの抵抗を笑顔で押し切ろうとするあたりは強引で、彼は見た目どおりの優しい人間ではない気もした。

しかしこうなったそもそものきっかけは、杏子がひどい言葉を投げつけたせいだ。雪成はその挑発に乗ったに過ぎず、現に今、こうして行為を途中でやめるといふ言葉からは彼の優しさが垣間見える。

杏子はいたたまれなさをおぼえた。

(わたしが悪いのに……)

——身勝手な自分を、雪成は尊重しようとしてくれている。そう考えると、杏子の胸がぎゅつと痛んだ。

孝一に一方的に関係を終わりにされ、自分に価値がないと思っていた杏子に、雪成は「そんなことはない」と強く言ってくれた。そのとき確かにうれしかったことを思い出すと、強烈な衝動がこみ上げる。

気づけば杏子は雪成の顔を両手で引き寄せ、ささやいていた。

「いいから、して。——最後まで」

「えっ」

杏子の言葉に、雪成が目を睜<sup>みは</sup>る。確かについ先ほどまで「嫌」だの「待って」だのと言っていた自分が急に態度を変えたのだから、驚くのは無理はない。

そう思いつつ、杏子は言葉を続けた。

「いいの。もう止まらないんだって、さっき言ってたでしょ。……あれは嘘だったの？」

「……それは」

わざと彼の台詞を復唱してやると、雪成はぐつと言葉に詰まる。彼はひどく驚いているようだったが、杏子もまた、大胆なことを言う自分に驚いていた。

緊張しながら彼の反応を待っていると、彼はしばらく考えこんだあと、杏子を見つめて問いかけてくる。

「……本当にいいんですか」

——「今だけ」なら、たとえ行きずりでもなりゆきでも、かまわないんじゃないかという気がしていた。

つきあっている相手以外とこんなことをするのは初めてで、緊張する。だが、このまま突っ走ってしまいたい衝動を、杏子はどうしても我慢できない。

それは孝一の件がショックで投げやりな気持ちになっっているせいなのか、それとも目の前の雪成の優しい触れ方に流されているからなのかは、わからなかった。

複雑な気持ちを抱えながらうなずく杏子を、雪成は真意を探るようにじっと見つめてくる。その眼差しに思わず高鳴る鼓動を持って余していると、彼は身を屈<sup>かが</sup>め、杏子の髪にキスをしてささやいた。

「……優しくします」

その一言を聞いた杏子の頬が、じわりと熱くなる。

改めて雪成は、杏子の体に丁寧に触れてきた。首筋から鎖骨、胸までを唇で辿り、手のひらで肌を優しく撫<sup>な</sup>でる。

長い指で再び花卉を開かれた杏子は、ぎゅつと目を閉じた。ゆっくり中に指を挿<sup>い</sup>れられ、内装<sup>ひだ</sup>をなぞる動きに、ゾクゾクする。

「あ、……っ」



胸の先端を吸いながら動かされた途端、中がわななき、彼の指を強く締めつけた。指先がときおりひどく敏感なところをかすめ、甘ったるい感覚が湧き起こる。再び濡れ出したそこは、雪成の指が動くたびに湿った音を立てた。

「っ……………あ、は……………っ……………」

「声、我慢しないで聞かせてください。……………すっごく可愛い」

雪成にささやかかれ、杏子は顔を赤らめる。反応をつぶさに見られていると思うと恥ずかしくてたまらず、彼の顔から視線をそらして小さく言った。

「……………っ、もう、いいから、早くして……………」

「何言ってるんですか、もったいない」

肌にくづけを落とし、雪成が笑った。

「きれいですよ、あなたの体。細いのに柔らかくて、触れた分だけどんどん潤う——うんと声を上げさせたくなる」

「あっ、あ、だめ……………」

根元まで埋められた指が、奥の感じるところをぐっと押し上げてくる。触れればビクと反応するところを執拗に穿たれ、杏子は声を我慢することができなかった。溢れ出した愛液が、雪成の手を濡らしているのがわかる。彼の指を受け入れたところからは耳を覆いたくなるような淫らな水音が立ち、杏子の羞恥を煽った。

(あ、もう、きちやう……………)

快感に追い詰められ、切れ切れに声が漏れる。中を掻き回すのと同時に花芯を押し潰された瞬間、杏子の体の奥で強烈な快感が弾けた。

「っ、あっ……………！」

強すぎる快感に、ビクリと体がしなった。一気に汗が噴き出し、心臓がドクドクと音を立てている。

息を乱してぐったりする杏子の中から、雪成が濡れた指を引き抜いた。彼が動く気配がして杏子がぼんやりと視線を向けると、雪成は腕を伸ばし、ベッドサイドから避妊具を取り出すところだった。

ほんの少しの間のこと、膝を押される。蜜口に熱をあてがわれ、杏子が緊張で息を詰めた瞬間、雪成が中に押し入ってきた。

「ん……………っ……………」

入り口のわずかな抵抗を、硬く張りつめた切っ先が割り開く。隘路をじりじりと進む重い質感が苦しく、杏子は手元のシートをつかみ、ぎゅっと眉を寄せた。

何度か抜き差しを繰り返し、雪成が慎重に奥まで入ってくる。やがて先端が最奥に到達し、彼は杏子の顔を覗きこんでささやいた。

「……………苦しきくないですか」

「っ……」

根元まで埋められた大きさに、強い圧迫感をおぼえる。

杏子は手を伸ばし、雪成の腕をつかんだ。そして浅く息をしながら、小さな声で言う。  
「少し、動かないで……っ……あっ……」

「いいですよ。慣れるまで、じっとしてますから」

雪成が笑い、杏子の頬に優しくキスを落とす。なだめるようにあちこちに唇で触れられ、次第に杏子の体から緊張が抜けた。

「……はあっ……」

体内の雪成を無意識に締めつけた瞬間、彼が軽く息を詰める。雪成は目を細め、緩やかに腰を動かしてきた。

「ん……っ……あ、っ……」

彼の大きさに馴染んだ内部が、徐々に潤み出す。硬い屹立に動かれると柔褻が擦れ、ゾクゾクとした感覚が杏子の背すじを駆け上がった。

雪成は少しずつ律動を大きくし、ときおり深いところを突いてくる。中を埋めつくされる感覚に体温が上がり、杏子は思考が乱れていくのを感じた。

「あっ……はあっ、……んっ……」

硬い熱を押しこまれ、奥を突き上げられる動きに、体の奥からじんとした愉悦がこみ

上げる。

驚くほど感覚が鋭敏になり、些細な動きでも快感をおぼえて杏子はそんな自分に戸惑っていた。少し眉を寄せて杏子を見下ろす雪成の目には、欲情が滲んでいる。その視線を意識した途端、杏子は体の奥が熱く潤むのを感じた。

「あっ……」

最初は気遣いつつ動いていた雪成が、杏子の反応に煽られたように動きを大きくする。苦痛はなく、揺さぶられるたびに甘い声が漏れた。彼はときおり息を吐いては熱っぽい眼差しを向けてきて、杏子はそんな雪成から目が離せなくなる。

（わたし……）

——好意を寄せられるのが嫌だった反面、求められて満足している自分がいる。

ふいにそう気づいた杏子は、ひそかに動揺した。

（好かれるのは嫌なのに……どうして）

蜜のように甘い快感が、次第に体の奥にわだかまっていく。思考が千々に乱れ、杏子が雪成の体に強くしがみつくと、彼が耳元でささやいた。

「奥、ビクビクしてる。……もう達きそうですか」

快感にかすれた雪成の声は、ひどく色気があった。杏子が息を乱しながら小さくうなずくと、彼は一気に抽送を速めてくる。